



【まつもと けんいちろう】 松本康一郎

商学科・会計学講座 / 教授

昭和51年 神戸商科大学商経学部卒業
昭和54年 神戸商科大学大学院経営学
研究科修士課程修了 昭和57年 小樽
商科大学赴任 経済産業省地域技術開
発関連事業に関する事前評価委員会、北
海道経済産業局創造技術研究開発費補助
事業事前評価、小樽市地場産業振興会議、
北海道地域総合振興機構道央地域振興計
画策定調査検討委員会、雇用・能力開発
機構北海道センター人材育成北海道地域
協議会、北海道科学技術総合振興センタ
ー知的クラスター創成事業事業化推進ワ
ーキンググループなどの委員を歴任。

と思うのですが、その具体的内容ま
では、なかなか伝わりにくいです。情
報公開はこれからの課題ですね。

松本：ですから、特定のテーマの公開
講座だけではなくて、たとえば、私た
ち教官が街まで降りて行って、商大の
活動報告をするということがあってい
い。今年3月に開催された市民と大学

との意見交換会「1日教授会」のよう
な機会がもっとあるといいですね。ほ
かにも定例報告会はあっていいと思
います。

齋藤：定期的に市民の方々に報告する
ことは確かに重要ですね。

松本：商大は「実学」というスローガ
ンをかけてきています。「実学」を
実践し、職員も含めもっと大学が市民
と関わるためには、先に関わっている
人が、自分の活動だけで終わるのでは
なく率先して、広く活動内容を知って
もらい、呼びかけをし、まだ関わって
いない先生や市民の方々に「あなたに
もこんなことができる」ということを
示すことが大切だと思います。

もっと授業内容の公開を

小笠原：私たち市民の経験やお話を先
生方に聞いて頂くと言うことも、先生
方の研究にはさらにプラスになる場合
があるのではないのでしょうか？

松本：それはそうです。それがないと
私たちもつらいです。こちらがエネル
ギーを吐き出すだけではとても疲れま
す。塾やゼミ方式のようなものだど、
その後こちらが「ほー」と思うよう
な反応が得られたりして、参考になり
ます。継続する力になるのです。

齋藤：教育面で教授同士の交流は、オ
フィシナルな形ではありませんからね。

松本：それぞれが研究者ですから、そ
こが難しいです。今後は改善しなけれ
ばいけないことですが、しかし、商大
でも教授同士の授業参観や、パワーポ
イントの使い方講習会のようなものも
やっていて少しずつ変わっています。

小笠原：個々の先生方の授業内容を拝
見すると、本当におもしろく参考にな
る授業がたくさんあるのに、学外の方
がそれを知らないというのは、とても
もったいないような気がします。もっ
とオープンにしてほしいですね。

齋藤：授業をそのまま公開授業にする
という形もありますが、コスト面や収
容人数の問題も考えて、私個人的には、

聴講生制度を充実させればよいと思
いますね。

小笠原：最後に北海道や小樽の可能性
や期待などについてアドバイスを願
いします。

齋藤：やりたいことができる地域であ
ってほしい。北海道は以外と開放性に
乏しい。しがらみが強いからでしょ
うね。しがらみを解き放って自己実現で
きる風土になってほしいですね。

松本：「北海道には外の人間が必要」
と道外の人はよく言います。私が北海
道に望むことは、たとえば大阪なら商
業の街、東京なら政治というような色
がありますが、その地域の特性をもっ
と出してゆくべきだと思います。各支
庁がみんな同じように経済活性やIT産
業に進めと言っても意味がない。こ
こでは経済、ここでは文化、観光とい
ったような特徴を出しつつ助け合うよ
うな活性化こそが北海道的だと思
います。狭い都市にはできないことが、広
い北海道ではできるのだと思います。

【おがさわら まゆみ】 小笠原眞結美

小樽市内で企画・デザイン・編集を業
務とする会社の代表。小樽市総合計画審
議会、同行政改革懇話会、同地場産業振
興会議、国土交通省国土と都市を考える
女性懇談会、北海道経済産業局北海道経
済の新生を考える懇談会などの委員を務
めた。家庭では夫、高1、中1の4人家族
の主婦でもある。

